

成人未婚者における自立のメカニズム分析 — 韓国の事例を通じて	
尹 鈺喜	ジェンダー学際研究専攻
期間	2006年9月12日～2006年10月8日
場所	韓国 ソウル
施設	国会図書館、中央図書館 <Focus Group Interview> ソウル、京畿道で居住する、 親別居の韓国人未婚男性 5人、親別居の韓国人未婚女性 3人 親同居の韓国人未婚男性 5人、親同居の韓国人未婚女性 3人

内容報告

(a) 海外調査研究の必要性と調査目的

現代の日本社会では、親世代の平均寿命が延びることによって全体的に親子関係が長くなっている。また、子世代の高学歴化による就職時期の遅れ、未婚化・晩婚化などの原因によって親と成長した未婚の子が接する期間が延長されるようになった。つまり、若い親と未成年の子どもとの関係である「前期親子関係」から、高齢の親と成人子との関係である「後期親子関係」へ移行する間に新たな親子関係が登場したのである。この時期の親子関係は、親子双方が成人として対等であるため、これまで親子関係研究の主たる対象であった未成年の子どもと若い親との関係や成人した子どもと高齢の親との関係とは異なる関係性が予想される。この時期の親子関係を「中期親子関係」という。

「中期親子関係」において、もっとも注目されているのは成人した子ども「自立問題」である。既存の若者は学校を卒業するとすぐ就職し、結婚をきっかけに親世代と分離することによって自立を達成してきたが、現代の若者は全体的に学校に在る期間が長くなり、また、就職時期、結婚時期も遅れていて、親から援助される時期が長くなっている。さらに、パラサイト・シングルといった言葉が流行になるように、親元で生活しながらさまざまな援助を受けて自由な独身生活を営む若者のライフスタイルが社会問題として浮かび上がったのである。

一方、韓国も子世代の高学歴化、就職時期の遅れ、未婚化・晩婚化といった日本と似通った社会現象が現れていて若者の自立が深刻な社会問題になっている。特に、韓国では「カンガルー族」(日本のパラサイト・シングルにあたる)と言い、親元から離れることを恐れる若者や、「ブーメラン現象」と言い、親元から離れて

一度自立してもまた親元に戻って援助を求める若者が増えている現状である。

そこで、修士論文では韓国人未婚男女を対象に量的調査を行い、韓国人未婚男女の経済的自立、生活的自立、情緒的自立に影響を与える要因や各自立との因果関係を明らかにした。しかし、量的調査の分析では自立のプロセスや若者において自立の意味づけを明らかにすることには限界があり、質的調査の必要性を強く感じたのである。なぜなら、「自立」というのは非常に複雑な概念であり、対象者において自立の意味やそのプロセスを明らかにすることによって、より精密な自立構造モデルを組み立てることができるのである。また、日本と似通った社会現象を経験している韓国の事例を分析することによって、自立の内容をさまざまな角度で分析することができると考えられる。

よって、2006年9月～10月にかけて、韓国に居住している韓国人未婚男女16人(男性10人、女性6人)を親と同居している男性、親と別居している男性、親と同居している女性、親と同居している女性、といった4つのグループに分けて、「Focus Group Interview」を実施した。その結果、若者においての自立の意味合いとそのプロセスの詳細を分析することができた。

① 経済的自立 — 就職による収入を得ること

まず、男性の調査対象者に自立のイメージについて自由に述べるようにしたとき、親と同居している者、別居している者ともに経済的自立がもっとも大事な自立の要素として述べられた。つまり、金銭的に親に頼らず自分の身の回りにかかる費用を自ら払う状態を自立とみなしていた。特に、経済的能力は自分の親と新しい家族を養うことができるかどうかの基準である意

識が強かったので、結婚と強い関係性を持っていることが考えられるのである。一方、税金を払う能力を経済的自立とともに自己管理能力があるとみなし、自立の基準として取り上げたものもある。

「自立を言うときにもっとも多く言われているのはお金だよ、お金。親から金銭的に依存しているか、していないかその違いだと思う」（ジンさん、男性、親別居）

「お金をたくさん稼ぐという意味ではなく、人生を営むするにはお金の影響力が大きいから、自分が生活できる程度の経済的な余裕があるということ。」（ジョンさん、男性、親同居）

一方、女性の対象者にも経済的自立は若者において重要な自立の要素としてあげられた。親から経済的に自立することによって親から分離できるようになったという意見が多かった。しかし、男性の対象者で強く現れた経済的な扶養意識は弱く、自分の身の回りのことを自由に使えることから自立を意識すると考えられる。女性の対象者の中では、親に金銭的な援助をしている場合、自分を自立している人間として意識するより逆に親に縛られていると考える面も見られた。また、経済的自立というのは自立を一つの段階を踏んだことであって、経済的に自立したからといってその人が完全に自立した人間だとは言いきくいという意見が多かった。

「はい。経済的自立、つまり職業を持った後、親から自立をした気がします。今までは、ずっと親からお小遣いをもらいました。勉強するときはね。だけど、就職してからは一切ないですね。今は全部自分で払っています。食費も生活費も、そのようなもの全部…。」（カンさん、女性、親別居）

「経済的に自立するというのは、親からお小遣いを貰わずに、自分で稼いだお金で自らかかる費用を負担できること。また、親にお小遣いを差し上げることができること」（パク、女性、親同居）

「しかし、まずは経済的な自立から始まるけど、完全な自立は情緒的自立で完成されることじゃない？」（キム B さん、女性、親同居）

② 情緒的自立 — 意思決定能力、親からの心理的分離、親との親密感、

次に、経済的自立と対立して述べられたのが情緒的

自立である。つまり、自分の身の回りのことについて自分の意思で決められることができる意思決定の能力と親から心理的に分離しているのか、また、親と情緒的親密感があるのかについて語られたのである。特徴的なのは、男性の場合、親の意見を尊重するけど最終的には自分の意思でものこを決められることを情緒的自立として解釈することが多かった反面、女性の場合、親からの心理的なつながり・分離、または親との親密感について詳細に語るが多かった。一方、親からの情緒的に分離することは一緒できないという意見も見られた。

「情緒的に自立しているというのは、親の意見を尊重しつつ、決定的には自分の意思で行くこと、それが自立だと思う。自立していない人は親との意見がぶつかるときに、結局親の意見に引きつられることになる。」（ジンさん、男性、親別居）

「自分でお金を管理し、どこに使うかを計画し、または、人生を設計したり、誰かを会うか会わないか、この会社を辞めるか辞めないか、このようなすべてに対する決定権が自分にある状態。」（李さん、男性、親同居）

「私の考えでは完全な情緒的自立はできないと思います。親は生きている存在だけでも頼りになるし、親から言われた言葉は親がなくなっても自分の行動に影響を与えるから。また、私が親になったとしてもまた子どもに依存することになるから。だから、真の情緒的な自立は人間にはできないのではないか。」（チェさん、男性、親別居）

「私はもう自分の収入もあるし、自分の人生は自分のものだと思って、自分のことについては親に相談せずに自分で決めた後、親に通報するようには変わりましたが、それを親はちょっと寂しいと感じるらしいです。しかし、私はもう 28 歳だし、自分のことは自分で決めてもいいと思います。これからは独立した人間として親に助言を求めることはあっても親がいちいち干渉してはいけないと思います。」（カンさん、女性、親別居）

「私の母親の場合は、自分の子どもが一番だと思って何でも干渉する性格だから、なんだか、私は母親から自立することはできないと思うし、自立しようとするのが母親に悪いと思ってね…。親がなくなるまでは情緒的自立は難しくないかな…。」（キム A さん、女性、親同居）

「私は両親がどんなに苦労してきたか知っているの

で親から完全な独立は難しいと思います。だから、いつも親に何かをしてあげなければならないという、ある意味では恩返しをすることでもあるけど、ある意味では負担にもなります。このような負担が心の中にずっとあるので、収入があっても自分で使ってはいけない気がするし、親にあげなければならないという気がします。その面では私は自立していないと思います。自立したら親に申し訳ない気がして…。」(チヨさん、女性、親別居)

③ 生活的自立 — 家事、掃除など身の回りのことを自分ですること

韓国未婚女性に自立のイメージについて質問したとき、経済的自立、情緒的自立とともに取り上げられたのが生活的自立、つまり、家事、掃除など身の回りのことが自分でできることである。例え経済的に、情緒的に自立していると考えても身の回りのことを自分でできないと思ったら自分は自立している人間だと思わなかったり、初めて親から離れて生活をして自立を考えるようになったという語りを得ることができた。

「家事をやらなければならないから…もし私が自立(別居)する前だったら自立と言うと自由とかが浮かび上がったと思うけど、実際に、親元から離れて6ヶ月間暮らしてみたら、家事を自分でしなければならないことがあるから、自立はそんなことが自らできることだと思います。」(李さん、女性、親別居)

「親元から離れて一人で暮らしても親がおかずを作ってもらったり、いろいろ世話をしてくれる場合が多いから、それはまだ親に依存していることだと思う。」(キム A さん、女性、親同居)

「私は今、自分が自立しているとは思わない。なぜなら、現在働いていて収入もあるし、自分のことは自分の意思で決められるし、家の大事な事についても自分の意見が影響力を持っているけど、結局、一番小さいけど一番大事なこと、ご飯を作ったり、洗濯をしたり、掃除をしたり、身の回りのことは全部おばあさんがやってくれるから、私は一人の人間として自立していないと思う。」(キム B さん、女性、親同居)

しかし、韓国未婚男性とのインタビューでは生活的自立について言及がなかったことが特徴的である。

④ 親子関係

男女ともに子どもの自立に影響を与える要因として

取り上げたのが親との関係、親の影響力であった。まず、欧米の親子関係とは異なり、韓国の親の過剰保護や過剰支援は成人した子どもの自立を遅らせていると指摘された。また、親の経済的支援能力が低かったり、情緒的に子どもに過剰に頼る場合、子どもの自立は遅れるようになるという意見が多かった。

「自分が教えている教会の子どもに将来の未来について聞くと、美容師になりたいです、幼稚園の先生になりたいですと言いますよ。でも、実際は親からその職業はお金をたくさん稼げないからやめろ、と言われるらしいです。だから、子どもは関心のある分野と親がやってほしい職業の中で悩むらしいです。だから、自立する時期が遅れるのです。私は親の影響が大きいと思います。」(チェさん、男性、親別居)

「うちの母親は子どもにとっても献身的に何でもしてくれる方でしたので…母親は私を自立させたくないと思うし、私も母親から自立することについてとても罪悪感を感じます。なんだか、親不孝な気がして…」(李さん、女性、親別居)

⑤ 結婚

成人前期のライフイベントの中で、結婚は成人した子どもが親から物理的に分離される自立の基準としてみなされてきた。韓国未婚男女に結婚と自立との関連を聞いた結果、対象者の男性は、自ら新しい家庭を持つことによって責任感が生まれ、親から一人前の大人として認められるきっかけが結婚であると考えられる傾向が見られた。しかし、結婚は、経済的自立と密接に関連しているため、経済的自立ができてないと結婚までは至らないし、結婚したらからといってまだ親に経済的に依存していればそれは完全な自立とは言えないという意見が多かった。また、責任感が負担になるので結婚したくないという意見もあった。

「私は新しい家庭を作って妻と子どもが必要とすることを与えられることが自分にとっての自立だと思います。」(チェさん、男性、親別居)

「しかし、結婚して新婚夫婦の中で実際は経済的な能力がなくて親からお小遣いをもらっている人達が思ったより多いよ…それは自立とは言えないじゃない。」(ジさん、男性、親別居)

一方、女性の対象者にも結婚が自分の親から物理的

に離れるきっかけにはなる反面、金銭的な面や育児支援といったさまざまな面で親からの援助は続くため、結婚が完全な自立とは言えないという指摘が多かった。また、結婚を親からの依存から夫への依存に移ったという意見も見られた。

「結婚が一番自立する基準じゃないかなあ…。その前に情緒的に親に依存したとしたら、結婚をすると新しい家族ができるから。ある程度分離ができたといえると思います。そして、ある程度自分が一つの人格を持ち、私の家族に安らぎになり、精神的な力になれるならそれが本当の自立ではないかと思います。」(李さん、女性、親別居)

「わが国の場合は結婚したとしても、親がずっと世話をしてくれる場合も多いし、お使いさんのように親に育児も頼むし、面白いのは経済的に自立した女性ほど親への依存度は高いことだよ。…しかも、私の妹は結婚して親からは自立したけど、彼女はまた夫に依存するようになったから、結局自立しているとは言えないね。」(キム A さん、女性、親同居)

⑥ 別居

別居については、生活的自立と同じように男女に意見が分かれた。男性の場合、現在親と同居している者、別居している者に関わらず、親元から離れて住むという行為が若者の自立に直接影響を与えないと答えた反面、親と別居している女性の場合、親と別居することによって自立の大変さを感じると答えた者が多かった。つまり、別居というのは生活的自立と関連して、親と分離して自ら生活を組み立てることで自立を考えるようになると思われる。

「私は今回始めて家を出たのですが、今までは2週間以上家を空けたことがなかったです。ここに来て新しい職場になれることだけでも大変なのに、新しい環境で一人暮らしをしてみたら生活に必要なものが本当に多いことが分かったのです。その前は寮にも住んだことがないから、綿棒さえ自分で用意しなければならないことがショックでした、初めては。」(李さん、女性、親別居)

⑦ 入隊

韓国男性の場合、徴兵制による入隊の義務があるため、公式的に親から離れるきっかけになるのは軍隊という。そこで初めて、自分の人生について悩んだり除隊した後の自分の人生について計画を立てたりする。

「私達の場合は軍隊ですよ、軍隊。軍隊に行ってきた人と行かなかった人は違う。軍隊の中でたくさん悩んで、これからどうしたらいいかを考えるようになって…」(ジンさん、男性、親別居)

「男性の場合、軍隊に行く前と行った後がとても差があると思います。親から初めて一番長く離れることになるのが軍隊じゃないですか。除隊した後、すぐ経済的に自立するわけではないけど、情緒的には親から依存することから変わると思います。」(金さん、男性、親同居)

⑧ 大学入試

韓国では、高校から大学入試が子どもの自立に大きな影響を与えるという意見もあった。つまり、初めて大学に落ちてから自分の人生について考えるようになるという。また、大学に入るときに、自分の意思で大学や専攻を選ぶので、それが初めての大きな意思決定を果たすことだと考えられるという。また、大学に入ってから親と過ごす時間が本格的に少なくなるので親から分離されるきっかけになるという解釈もあった。

⑨ 社会的雰囲気

現代若者が自立できない理由として、社会構造の問題、そして、社会的な雰囲気が指摘された。大学教育の一般化によって、また、ドラマの主人公が演じる専門職への願望は高まったが、実際専門職に就くのは少数に過ぎないこと。そして、経済的不況によって公務員や教師など安定的な職業に人が集中し、恥ずかしいと思われる職種には人手が足りない状況になるという。つまり、一元化している社会的な雰囲気、または、違和感によって、若者は真の自立を果たせないということである。

⑩ 自立の実態と意識との関連

経済的自立(実態)と情緒的自立との関連について質問したとき、情緒的自立は人間が人生を生きる中で少しずつ達成することであり、その一つの行動として経済的自立や生活的自立が行われるという。また、経済的自立や結婚、別居というイベントを経験することによって情緒的により自立するようになる。つまり、情緒的自立がずっと続く中で、経済的自立や生活的自立は一つの行動として現れると考えられる。

「情緒的自立はある時期パッと訪れることではなくて、年を取ることによって少しずつ達成できると思います。その中で、思秋期のときにもうちょっと大きく成長し…経済

的に自立するともっと自立した人間として考えるようになるでしょう。また、自分でやりたいことをやりながらちよつとずつ自立していくことでしょう。だから、情緒的自立をしている途中経済的自立ができると思います。」(李さん、男性、親同居)

「私は一生親の影響から離れることはできないと思うから、結局、就職をしても、結婚をしてもその関係が弱くなることはあってもなくなることはないと思う。だから、私は一生情緒的自立を少しずつしていく中で、経済的自立や生活的自立が行われると思う」(バクさん、女性、親同居)

(b) 本研究の位置づけと今後研究の方向性

修士論文では韓国若者の自立について量的調査を通して、経済的自立・生活的自立・情緒的自立のプロセスとそれぞれの自立に影響を与える要因を明らかにした。また、本研究では、「Focus Group Interview」を行い、韓国の若者において自立の意味づけと各要素との関連

を詳しく分析することができたのである。今までは、若者の自立について社会構造の問題を取り上げたり、若者の自立意識を指摘し、親との同・別居と経済的能力を中心にした研究は多かったが、若者の自立の定義やその内面的な構造を明らかにした研究はほとんど行われていなかった。よって、本研究は若者の視点から見た自立の意味についてより詳細的に分析することができたことから意味のある研究だと考えられる。よって、今後成人未婚者と親をセットにした調査をするときにそのモデル作りや仮説を立てるときに本研究は非常に重要な資料として使われると考えられる。

(c) 今後の計画

本海外調査研究は博論のモデル作りの土台になると考えられる。また、この質的調査から得られた結果をまとめ、2007年の日本家族関係学会に発表し、同雑誌に「成人未婚者における自立のメカニズム分析—韓国の事例を通じて(仮)」というテーマで投稿する予定である。

ゆん じんひ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 ジェンダー学際研究専攻

【指導教員のコメント】

尹さんは本学の生活政策コースで修士号を取得した。修士論文では韓国の成人子の親からの経済的、情緒的、生活的自立意識に焦点をあてて量的モデルを韓国で収集されたデータをもとに分析した。この修士論文で明らかになったことは自立に関する男女差であった。しかしこの男女差を解明するには量的データよりも質的データを集めて自立の定義、意味、プロセスなどをより良く理解することが必要と認められた。今回の尹さんの海外調査では京畿道とソウルに住む未婚の韓国人男女に対してフォーカスグループインタビューをおこなった。韓国では多くの若者が親から自立できないでいることが問題視されているが、この問題に関する研究は非常に少ない。更にフォーカスグループインタビュー法を用いた研究も少ない。このような状況を踏まえて今後韓国では若者の自立のメカニズムを理解する必要性が増大すると考えられる。今回の尹さんの海外調査では若者の自立意識が男女でどのように違うかを解明したが、この結果は今後の量的調査での調査票作成やデータ収集、分析に多大な貢献をするであろう。

(人間文化研究科 教授 石井 クンツ 昌子)